

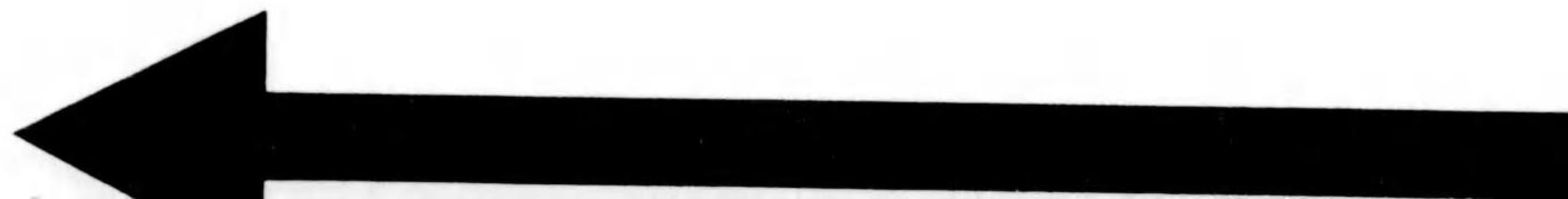


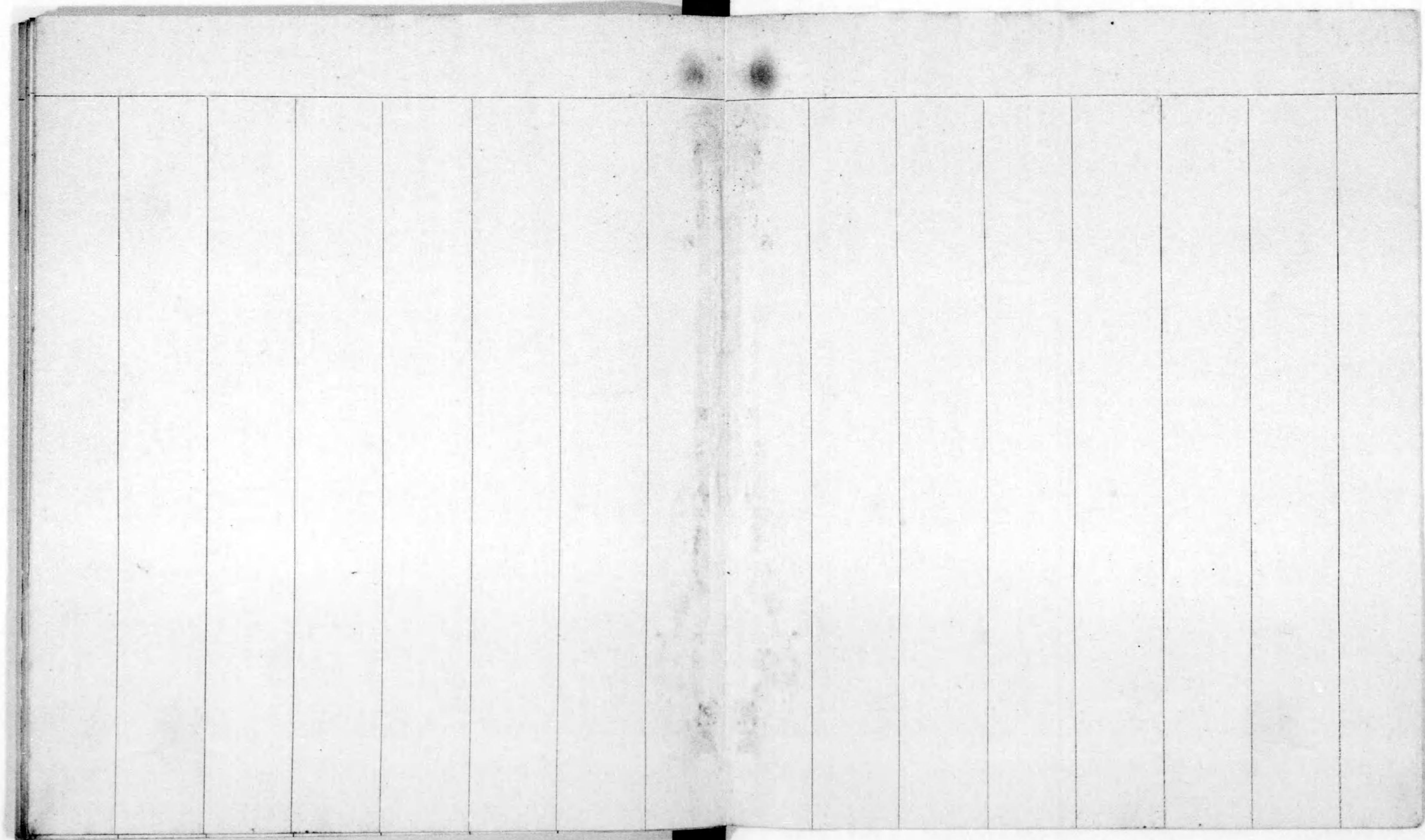
特 101

470

和露句集
V

始





特101
470



碧師の銀婚を歡びて

和露
14. 11. 2
寄贈

寄贈本



和露が第五句集を作つて、私の
銀婚式を記念してくれろ。

和露と私の間では、私の記念す
べき日は、又た和露の記念すべき
日なのである。

大正十四年八月十五日

碧梧桐

和露句集 第五

董哉逝く

春の霰のふつきらぼり

悼牛後

川つばめ濡つばめ流れた

悼泰山

蟻がこつこつ糧を獲た

掃庭の小松がふぐりをつけた

大きな顔の馬を休ませてをる

へうたんのあだ花が咲きのぼる

吟水の妻の訃

起きぬげの朝顔が白

蟬は摺まれ耳にあてられ鳴く

土用萩で今朝咲いた

かぼちやが石ころを覆ふた生つた

一堂を悼む

見馴れた鶏頭が倒れた

白菊ばかりつくりおほせた

こかう山茶花が散つて

著森を悼む

桐の葉を搔き亂さうとする

愛香子を悼む

あたたかう枯木に觸れた

映紫樓が母の

古稀の賀

ふくつと茶が咲いて

善三郎新婚

早咲椿に口づけた

尖渦新婚

目ざこに梅が咲いてゐる

程一の祖母を悼む

梅の花が乾いて見える

椿が仰向いて眞赤だ

木の芽かなめの芽あかう

かみなりつぶれの地雨こなつた

夕立ち二三寸が夕立つた

碧先生を

箱根丸に迎ふ

BUOYの掛つた手欄に先生や

箱根丸を送る

私達は船の上の秋空

なぞんだ船で海をのぞく

百舌がたけんで姿をみせた

亡女三十五日

燈を明うして佛の蜜柑をむき

満中陰

わしはもう日の目をこぼがるまい

智恩院納骨

かつこあかい廊下の雪空

手がたは残れど

足がたは残らず

おろおろ念佛にすがらせてもらふ

關根船長を迎ふ

手套をぬぐテーブルに觸れる

富貴樓で

三階で角火鉢が經つた

焚火を小さくする者ら

草夢婚賀

けふの炭斗の炭の嵩

奉悼光瑩上人

おどおど火鉢がいかつい

箱根丸船長見送

警笛が握られて革手套

木かげにつつこひこばえた

梅の枝がつきでて咲きます

一羽の雀さわいでしもた

早いさくら木立に圍はれ

山吹りんりんもつれて

山吹つぼんで伸した

義介の長男を悼む

ちるさくら脚がしてある

夕べの籐椅子の深さは

蜂が地べたに漁り下り

若竹のせつせつ落とす皮ぞ

山近い素雷こなつた

楯郎の母を悼む

朝顔が卒爾に咲きつぐ

よう鳴きうつる夕蟬だ

蚊は敷居を越して止まつた

青柿へ荒い梯子がこどいた

震災難

赤こんぼ崖角にたかりたがる

夕ぐれのいつまよくたの葉雞頭

小菊が去らんこしてしまた

大呂が次男

和來を歡ぶ

まんぢりこ小菊があかい

炭斗をかたむけて炭

手のつめたい逃避です

箱根丸歸る

けむり吐き切つた煙突の下

芝枯れてゆく限られ

豆の芽豆の芽がはぜる

厚手套で人込みをぬげよとする

夕氣の雪ぐせの日伸び

餅搗く音がふえるまつくら

つむじ風雀ついでむだ

元旦の佛につかうまつる

家の衆の御慶をうけをはる

裏白かざつた墓にまゐる

萬歳のさきを歩いてゐた

首卷にくるまる人づれ

道へ流れる家のけむり

山拓く人が目についてくる

雀を殺生する人中に

繁一を悼む

枯草がたんまり広い

そそつに薪を割つてみます

御婚典

ほうほうご大雪になつた

雀を起たしてやる土まみれ

子雀は枝をゆすつころ

馬子の手到手綱が長さう

ものかげに雀脚をそろへた

すずめ餌が勝ち走る

くねつた桃ざらこ咲いた

ひよこ埒内の親をみつける

雑木に交りうこんざくら

聽蛙亭

雨上りのかたい葉が落ちる

徳本寺舊址

沙羅双樹が枯れてあつた

文平翁亡し

こんびが鳴いた鳥が鳴かすのやろ

夜目にも黒い首巻を志め

道ぞひ落葉しやすう

英雄版畫集出來

凭り添ふて大火鉢にて

おもや去んたくよいお正月です

鐵板立てかけた柱の曆

山風さつゝ雪になつて

米屋もおそがけにこんどする

寒雀梢のハナへ來ころ

古鶯が餌着かうとする

台水翁還曆

梅の蕾がふくれんぼしるる

あくせく空の黒けむり

竹の門を哭す

梅が咲いてくれ
榎樟が咲いてくれ

ばたばた咲く椿のかげ

どんより櫻の花びらが散る

平安堂の母を悼む

ははそはのさくらまざかり

ぞんざいに咲いころ朝櫻

秩父宮殿下御渡英

御乗船筥崎丸

關根船長饒別

船長さんへ海の風にあてる花花

垂水の両面紫蘇だつせ

朝顔咲いて鐵をやかまじういはす

阿蘭陀渡再興

橙郎

甕雞

浮沈子

各靈に手向ける

長い蔓のやぶれあさがほぢぢや

ススリンススリン風鈴賣が來た

顔のほこり簾をまさあげる

日覆した馬米をこぼしてゆく

お天氣の蟬蟬遠退く

蟻が去つなう木にのぼる

花賣り車でにぎやか

子守星がまたたきした

海の空の汐つばい一つ星

水取場にまた鍛冶屋がふえた

ふつと數珠を掛けておく

大阪近くの案山子があんばいしてある

社家の芙蓉も實になつた

作者兼發行者

神戸市兵庫東出町二丁目二六

川西德三郎

發行所

神戸市兵庫東出町二丁目

川西和露文庫

印刷者

大阪市東區横堀二丁目五六

山本隆三

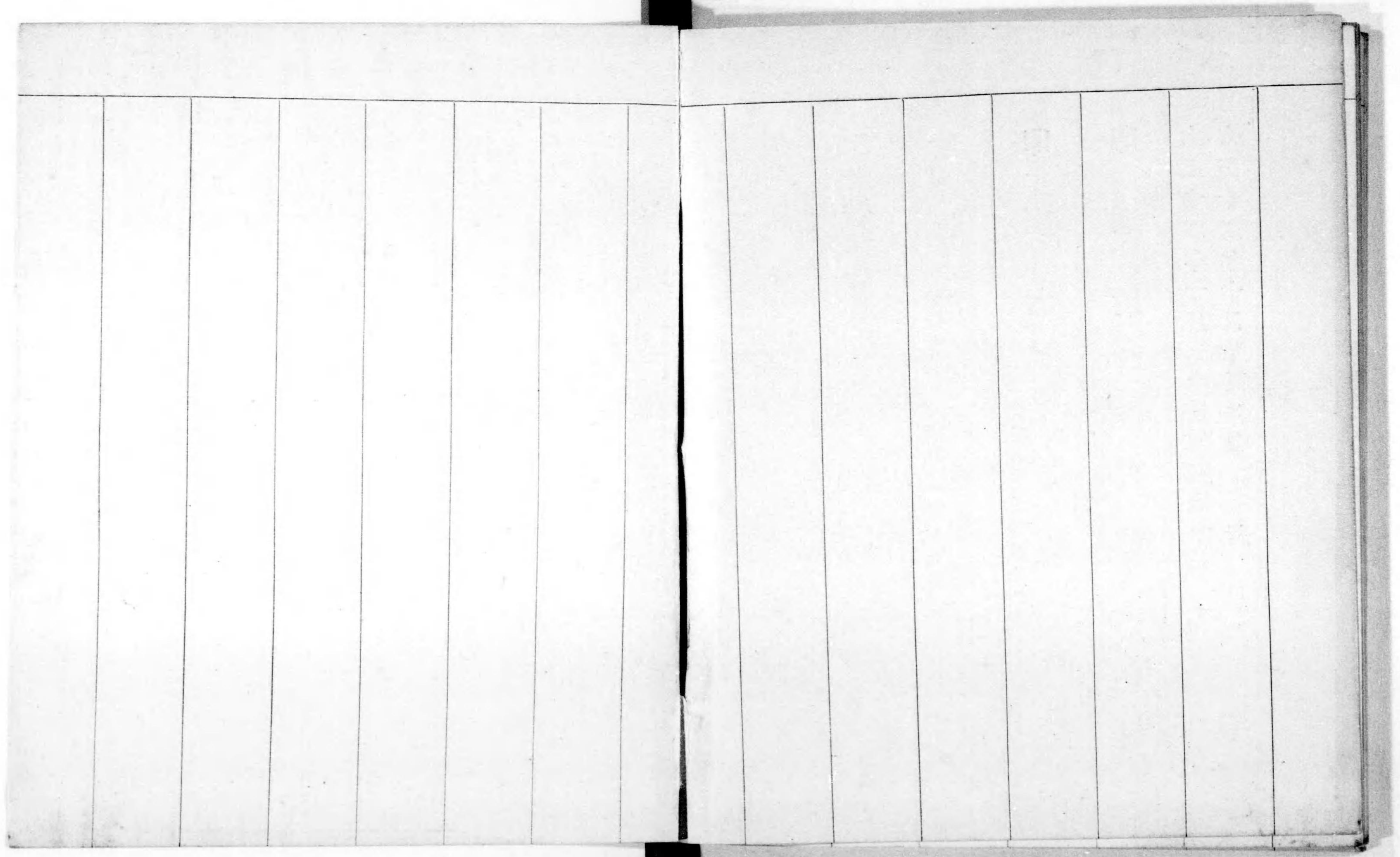
印刷所

大阪市東區横堀二丁目五六

實業日報社

電話本局三九〇八番

大正十四年十月二十日印刷納本
大正十四年十月廿五日發行



終

